



9月2日の百寿総合研究センター
開所記念シンポジウム

百寿者研究の現在と未来

医学部精神・神経科学 教授 三村 將

世界一の長寿国である日本では、長生きすることはもはや珍しくありません。しかし、長く生きて平均寿命を延ばすよりもっと大切なのは、健康寿命（自立した生活ができる生存期間）を延ばすことです。これからはいかに長く生きるかではなく、いかにいきいきと長く生きるかが問われる時代です。

100歳以上の高齢者を百寿者と呼びます。塾の医学部では、1992年に老年内科（当時）の広瀬信義特別招聘教授（現在）、新井康通専任講師（現在）を中心として、世界に先駆けて百寿者研究が創始されました。当時は5000人にも満たなかった百寿者も現在は5万人以上に増加しており、今世紀半ばにはなんと100万人に上るとする試算もあります。

百寿者や、さらに110歳以上の超百寿者はまさに健康長寿のエリートと言えます。このような百寿者、超百寿者のエイジングの秘訣を説明していくには、さまざまな分野の学際的連携が必要です。もともと広瀬氏や新井氏たちが百寿者を一人ひとり丹念に訪ね歩いて集めてきた資料・情報ですが、この20年で遺伝子解析や生化学的分析など、

基礎医学領域の手法は飛躍的に進歩しています。また、社会学、心理学、環境学など、多様な異分野の研究者間コミュニケーションが問題解決の鍵となります。

このような状況の中で、医学部では、これまでの超高齢者研究をさらに発展させていくべく、百寿総合研究センターを開設しました。去る9月2日には同センターの開所記念シンポジウムが開催され、林芳正農林水産大臣（当時）らのご挨拶、百寿者の遺伝子や脳、健康度、性格といった問題に関する包括的なシンポジウム、さらに生理学教室の岡野栄之教授による教育講演が行われました。最後は百寿の具現者でもある聖路加国際メディカルセンターの野原重明理事長による「これからの時代を担う若者へのメッセージ」と題する特別講演で、若い世代への思いを熱く語っていただきました。現在、塾が総力を挙げて取り組んでいるセンターオブイノベーション（COI）やリーディング大学院も健康長寿を謳っており、さまざまな分野の若い世代におおいに百寿者研究に参画していただき、「豊かな長寿社会の実現」のための研究拠点としていきたいと願っています。